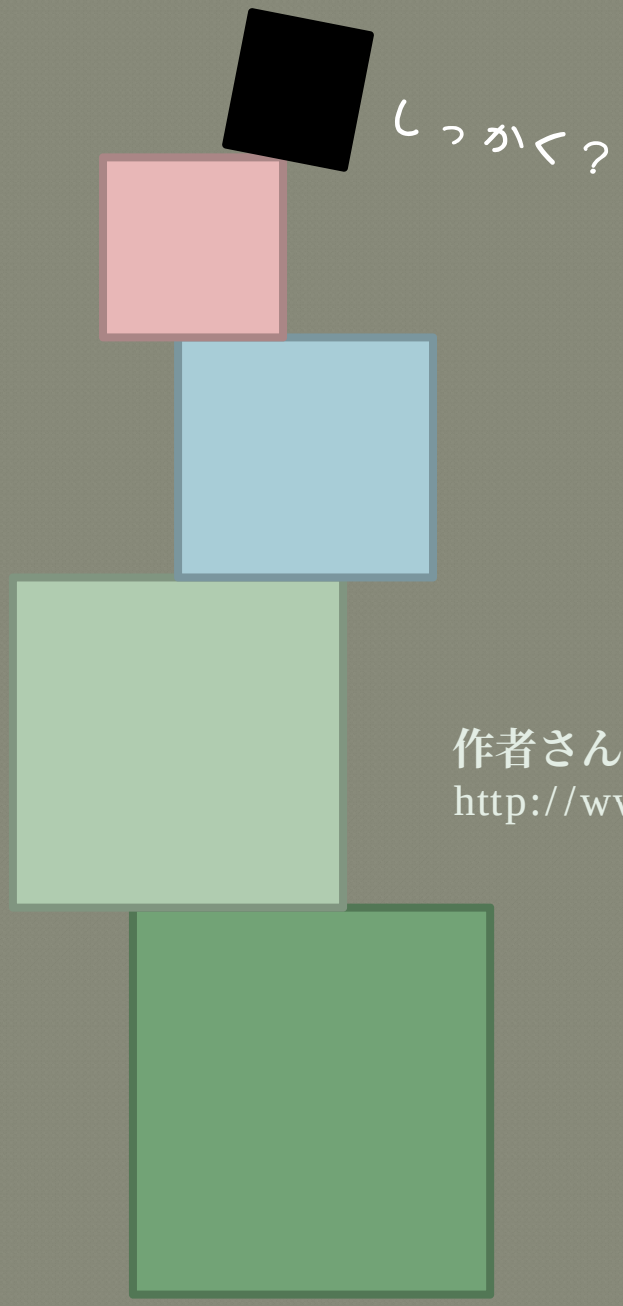

作者さんや読み手さんの声は
http://www.columnland.net/　にてどうぞ

スチール缶

スチール缶、フタ

「開け口」

アケ口？

正義の味方？虫歯菌

「口を開けてくださいね。すぐ終わりますから。」
小さなドリルと小さな吸引機が口の中に入れられる。モータが回転し始め、虫唾の走る切削音が脳天に響く。時折、ドリルが神経をえぐり、言い知れぬ激痛が走る。痛い、と声にならぬ声をあげるが、医者は、少し我慢してくださいね。すぐ終わりますから、とだけ言い捨てる。ドリルの回転が止まる。開放されてうがいをし、ほっとしてまた横になる。医者はまた言う。
「口を開けてくださいね。すぐ終わりますから。」

虫歯になったことのある人なら歯科医院でこのような拷問を経験したことがあるかもしれない。虫歯は現代社会において風邪と並ぶ最もメジャーな病気であり、学校などでも予防などのための授業が設けられている。そこでは大抵、虫歯を引き起こす菌が悪者であるが、はたして本当そうであろうか。

まず、虫歯について説明しておこう。私たちの口の中には多くの菌が生息しているが、その中にミュータンス菌やラクトバチラス菌といった虫歯を引き起こすいわゆる虫歯菌がいるのである。これらの虫歯菌は歯の表面に付着して数を増やしていき、食品中に含まれる糖分を酵素を用いて分解し、酸と不溶性のグルカンという物質を産生する。そして、虫歯菌たちはその酸とグルカンを温床にしてさらに数を増やしていくのである。産生された酸は歯の表面にあるカルシウムを奪い取っていくが――これを脱灰という――脱灰が始まったころは、唾液には酸を中和してアルカリに戻す作用があり、また、カルシウムやリンを含んでいるので脱灰された歯を修復することができる――これを再石灰化という。しかし、糖分の継続的な摂取などにより再石灰化が脱灰に間に合わなくなると、遂には歯のエナメル質を破壊してしまうのである。これが虫歯である。エナメル質が崩壊すると自然治癒は不可能となり、歯医者という名の拷問執行人のお世話になる。

このように虫歯が起きるのであるが、悪者とされるのは虫歯菌である。しかし、虫歯菌が悪者と言えるだろうか。自然界の営みにおいて基本的なのは破壊と再生の平衡である。すなわち、古いものは常に新たなものに入れ替わり、停滞して腐敗するということが起きないのであり、逆に、この平衡が崩れたときあらゆる障害が起きるのである。例えば、私たちの骨をとっても、骨を壊す破骨細胞と骨を作る骨芽細胞とがバランスを保って骨を形成しており、骨粗鬆症などはこれらのバランスが崩れたときに起きる障害である。とするならば、虫歯もこれと同じではないか。本来、虫歯菌と唾液とが織り成す破壊と再生は良いバランスを保ってきたが、近代からの糖分過多の食生活や、柔らかく歯に付着しやすいものばかりを食べる食生活が、保たれていたバランスを破壊してしまい、その破壊されたバランスが虫歯として見える形となって現れているのではないか。虫歯菌は悪者扱いされているが、実は、バランスを平気で破壊する愚かな私たちに助言し正しい方向を指し示す正義の味方なのかもしれない。

□ほしいもの

私は昔から「ほしいものリスト」を作るのが癖でした。

ただの買いものリストに物足りなさを感じたのが始まりだったのでしょうか。幼心に「あれもほしい、これもほしい」と、ひとり胸を弾ませながらメモ帳いっぱいに書き連ねていたのを覚えています。もちろん、全てを買うお金など無いことぐらい、私にもわかってはいるのです。それでも、沢山書いたもの一つ一つに、慈しみをこめて□を書いていきました。埋まることなど無いはずのチェックボックスを。

そしてやはり、ほしいものは書いた半分も手に入らないのですが、なぜだか私は「ほしいものリスト」をやめようとはしないのです。新しい鞄、新しいワンピース、パンプスがほしいな、でもブーツも欲しい——私は今でも、まるで全てが手に入るような気分になって、埋まらない□を書き続けているのです。滑稽な話でしょう。

不思議なものです。手に入らないことはわかっているのに、どうしてなのか、手に入らないものほど愛おしく思えてしまうのです。空欄のままの□ほど、いつか埋めてあげる日を夢見てしまうのです。「手に入らないものほどほしい」なんて、わがままだとは知っています。けれど私には、そんな無いものねだりのリストこそ、きらきらして見えてしまうのです。

小学校の頃に書いた「□新しい筆箱」は、一度印をつけてしまったら、二度とリストに現れなくなりました。「□赤いパンプス」も「□チェックのマフラー」も、今の私には手が届いてしまうのでしょう。それに幸せを感じる一方で、少し寂しがってみたくもなるのです。

何となく満ち足りてしまった生活に、無い物ねだりをぶつけてみたい、だから私の「ほしいものリスト」は日に日に贅沢になっていくのです。埋まらない□に愛をこめて。

絵描きの話

小さな森の中に、一人の絵描きがいました。

良い絵を描くと町で評判の絵描きでしたが、彼自身は自分の絵の出来になかなか納得が行かぬことに、常々悩んでおりました。

その日も彼は森の奥にある泉のそばでカンバスを立て、筆を持った右手を前に突き出して、描けぬ絵を描こうと虚空を睨んでいたのです。

気難しそうな顔にしわを寄せながら、筆に絵具をつけようと左手の絵具板に筆を持っていこうとしたとき、

「あ！」

真っ白な紙を睨みつけたままだったので手元が狂い、左手の親指と人差し指に絵具がべったりついてしまいました。

絵描きはいよいよ不機嫌そうに筆を放りだすと、手に付いた絵具を落とすため、泉へと歩きました。

静かな森の奥にある、透きとおった水の湧き出る泉は、絵が描けなくなると決まって足を運ぶ、絵描きのお気に入りの場所でした。

泉の淵で絵具を洗い落とそうと身をかがめたとき、ふと名案が浮かびました。

「そうだ、この泉を絵に描いてみるか。」

行き詰まるたびに足を運んでいるのに。そういえば泉を絵に描いたことはありません。腕のいい絵描きが気に入るほどの良い眺めですから、それはさぞ良い絵が描けることでしょう。

絵描きは期待に胸を弾ませながら、両手の親指と人差し指をくっつけ、四角い枠を作って左目でその中にある泉の眺めを覗きました。

不思議な出来事は、そのとき起きたのです。

突然、反対側の淵に足をひたして涼しげに笑っている、きれいな水色の服を着た美しい少女の姿が見えました。

「そんな馬鹿な。」

ついさっきまで、泉にはたしかに彼しかいなかったはず。そもそも絵描きがこの泉を気に入っているのは、他に誰もこの場所を知る人がいないからなのです。

絵描きは自分だけの場所に立ち入られたことに怒りを感じ、少女に声をかけようと立ち上がりました。

「おい、そこで何をしている！」

すると、誰もいませんでした。少女の姿は一瞬にして、まるで泉に溶けるように消えたのです。

絵描きは一瞬自分の目が信じられませんでしたが、どうやら根を詰めすぎて何か見間違いをしたらしいと思い、気を取り直してもう一度両手で枠を作りました。

「そんな馬鹿な！」

枠の中には、またしても美しい少女がいたのです。

少女は絵描きの叫び声に気付いたのか、泉の淵に座ったまま絵描きに手を振って笑いかけました。

一方絵描きは気が変になりそうです。

そして、気が付きました。手の枠を顔の前からどけると、少女はまたもいなくなり、枠の中から泉を見れば、少女が座って笑っているのです。

今度は自分の手が信じられず、両手をまじまじと見つめて絵描きはさらに気が付きました。

「さては、この絵具か。」

絵描きの手には、落とし忘れたままのきれいな水色の絵具がべったりとついています。

泉の水で絵具をきれいさっぱり落してみれば、手の指をどんなふうに組んでも、やはり少女は影も形も見えません。

「あれは、絵具の精のようなものなのかな。」

少女はきれいな水色の服を着ていました。それは絵描きの一番好きな色でしたから、それが手に付いた絵具とまったく同じ色だったことにも、彼はすぐに気が付きました。

そこで絵描きはふとあることを思いつき、絵を描いていたところに行って絵具の箱と絵具板を取ってきました。

「今度は、また別なものが見えるに違いない。」

水色の絵具を落した指に、今度は緋色の絵具を塗ってみたのです。そして、同じように手で枠を作って覗きました。

「見えた！」

泉の向こう岸には、見事な緋色の毛並みを持つ虎が寝そべっていました。猛獣の姿に一瞬どきりとはしたものの、本物の虎ではないことがわかっているので、絵描きはその姿を存分に眺め、観察しました。

そして、絵描きは次々に絵具の色を変えていきました。黄色、元気に遊ぶ子どもたち。白、降るはずのない雪。桃色、一面に咲く美しい花。

絵描きは色々な絵の題材が得られたことに、すっかり嬉しくなりました。そして、

「そうだ、こうすればいい。きっとこの世の眺めとも思えないような美しい絵が描けるぞ！」

絵描きは左手の指に、水色、緋色、黄、白、桃、そのほかきれいな眺めの見られる絵具を次々に塗っていきました。いろいろな絵具が混ざり合った彼の指が、泥のような色になっていることにも気付かずに。

夢中でかぶりついた四角い枠の向こうに見えたものは、それはそれは、ひどい眺めでした。

まさにこの世のものとは思えぬ眺めでした。

虎の毛並みも一面の花も、雪すらもが薄黒く汚れ、楽しげに笑っていた子どもたちは、まるで孤独な老人のような顔。

「ああ・・ああ・・・・。」

言葉を失い、しかし目をそむけることも出来ぬ絵描きは、その陰惨な眺めの一番奥に、それを見つけました。

泉に足をひたした、少女。見れば、泉の水すら泥のように濁っています。絵描きの一番好きな色だった服も泉の水と同じ色に染まり、泉の女神のようだった微笑みは、まるで

「うわあああああ！ああああああああ！」

絵描きは夢中で手を泉に突っ込みました。必死に指をこすり、こびりついた絵具を残らず落していきました。

全部の絵具が落ちたとき、もう何も見えませんでした。

再び指に水色の絵具だけを塗っても、あの美しい少女の姿はどこにもありませんでした。

そして——ふらふらとカンバスの前に戻ってきた絵描きは、筆を取って一枚の絵を描きました。最後の絵を。

それはそれは、美しい眺めを描いた絵でした。

この世のものとも思えぬような眺めを描いた絵でした。

突然だけど・・・

オイラ、口ってやつは人を幸せにする一番重要な器官だと思うね、

だってほら、考えてもみろよ

深呼吸する口は人にすがすがしさを与え

食べる口は人においしい喜びを与え

しゃべる口は人に楽しさを与え

口づけは人に愛情を与える

ほーら見ろ、こんなに人に幸せを与える器官をオイラほかに知らないぜ？

おっと、もうこんな時間だ。

そろそろおしゃべりして楽しい口をやめて、

言い訳して人に楽を与える口を乱用してこようかな、

さらばだ諸君、またいつか会おう。

待ってろ教授ー！

一羽の願い

そこにあるのは、ただの正方形
夢の欠片も感じない

裏に返せば、色も無く真っ白
病院の天井と同じだ

そこにあるのは、千羽の鶴
何の想いも感じない

みんな作れと言われたから、作っただけ
学校の宿題と同じだ

そこにあるのは、一羽の鶴
頼りなさしか感じない

それでも鶴は、千羽にひとしい
今、キミが折ってくれたから

僕はこの小さな町に住んでいる。でもここは僕の故郷ではない。いつ、どのような経緯で、どうしてここに来たのかは全く覚えていないのだ。この街は水もきれいだし、食べ物もおいしいし、なんてったって近所には友達がたくさんいる、だから故郷を離れてもちっともさみしくはなかった。でも、この街・・・少し変なんだ。

僕が故郷にいたころは、食べ物は自分で調達しに行ったもんだ。でもこの街ではその必要はないらしい。食べ物はどこからともなくいつの間にか町中にばらまかれているのだ。茶褐色のその物体は一見して食べ物とは到底思えないほどいびつな形をしていて、何か不自然な動きをしている。それを食べて行方不明になった者が何人もいるというので僕はそれを食べないようにしていた。

少しこの街を探検したことがあって、そのときに町外れまでいって来たのだけど、この街の向こうにはこの街よりずっとずっと広大な国が広がっていた。僕は走った。その向こうに故郷があるかもしれない。しかしその時僕は体を何か固いものにぶつけ、外に出ることができなかった。見えない壁だった。僕はその見えない壁が途切れているところはないかと必死に探した。でも見つからない。僕は完全にこの街に閉じ込められたのだ。

しかしこの街は一見したところ平和であった。僕の故郷では僕たちよりも格段に強い凶悪な殺人犯がよく街に現れて僕の仲間を連れ去っていってしまったもんだった。とは言ったもののこの街の住人はいつも何かに脅えている。僕が尋ねると彼らは口をそろえてこう言うんだ。

「僕たちは見えない糸に首を吊られて死んで行くんだ。」

普段僕はその町に住む小動物なんかを食べて生きているんだけどその日はどうしても獲物が見つからない。そんな僕の真理を悟ったように例のいびつな食べ物が僕の目の前に現れた。空腹に耐えかねた僕はそれに口を伸ばした。その時だった、口の中を何かでさされたような激しい痛みが襲い、その瞬間に僕は上の方へと吊りあげられていく。僕は必死でもがいたが太刀打ちできないほどの強力な力が加わっている。そして僕は今までいた世界とは全く異質な世界へと飛び出して行った。世界が明るくなった。体が軽くなった。僕は今まで見たことのないような巨大な世界へと足を踏み入れた。

それからのことはほとんど覚えていない。ただ誰かが僕には判別できない言語で何か話している声がする。そして僕は最初で最後、そら　というものがはるか彼方に浮かんでいるのを見た。

どみのふんとうき

高校最後の文化祭、メインイベントはドミノ倒しになった。文化祭実行委員会はドミノ組を設け、長大ドミノ計画に力を入れていた。文化祭前日の朝、問題発生。どこぞのアホが窓を開け放していたせいで、並べたドミノの大半が倒れていたのだ。

「文化祭は明日だ。みんな！　ここがいわゆる正念場だ！」
目の下にクマのあるやつも数名いたと思う。連日の追い込みで疲労も溜まっていたが、それでも和やかな雰囲気だったのではないだろうか。昼までは。

午後一時頃、休憩しつつ昼食をとっていると　緊急地震速報発令。
一同、焦る。が、成すすべも無くドミノ倒しすたーと！
目の前が、真っ暗になった。
やり場の無い怒りで場がギスギスする。疲れがピークに達し、テンションがやけにハイになる数人(俺を含む)。思考がまとまらないぜいやっほうっ！よれよれになりつつも、気力だけでドミノを並べる。
やがて『七割』が完成し、思わず俺は歓喜の声をあげた。

「よっしゃ～、あともう少しで完成

鶏襲来

先頭を走るのはケンタ(2歳3ヶ月)だ！　二番手はタマヒデ(3歳)、サンワ(4歳8ヶ月)、ニッシン(1歳9ヶ月)、アキヨシ(3歳5ヶ月)が続くぅ！　おおっと、後ろから追い上げるのは飼育委員ヤマダ(17歳)だ！　ヤマダ速い！　ヤマダ速い！　ニワトリ以上にドミノを蹴倒しつつ全てのニワトリを捕まえたぁ！　ふぃに～～っしゅ！

山田、リンチ決定。

何も言う気力の無いドミノ組と山田(の残骸)。みんな目が据わっている。
「次倒したら、そいつもリンチな。」
そんな殺伐とした合言葉を胸に、皆が一致団結した。正常な判断の出来ない中、必死にドミノを並べていった。力尽きる者も、いた。ただひたすら、倒さないことだけを肝に銘じ続けた。
午前八時五十七分、ドミノが完成。一枚も倒すことなく、並べきったのだ。

同日午前十時、長大ドミノ、スタート・・・ストップ。
全ドミノは床に接着されていた。

夕陽を眺めて

ゆうとはいつも夕焼けを見ていた。西の空が赤く染まり、カラスの声が響き渡るようになると、ふらりと公園に現れ、ジャングルジムの上でぼうっと空を眺める。日が沈むまで、ずっとずっと。ゆうとは口がきけなかったこともあり、周囲の子供たちには気味悪がられ、大人たちでさえも自分の子にゆうととは遊ぶなと言うほどであった。私もそのことは十分承知していたが、十歳になったばかりのある日学校から帰る途中、いつものように空を見ているゆうとがふと気になってしまったのだ。

「ゆうと、空になにかあるの？」

ジャングルジムの下からそう尋ねると、ゆうとはゆっくりとこちらを見おろした。小さな体に不釣り合いな大きさのランドセルの向こうからこちらを見るその顔は、私を認めると静かに目を細め、ただ右手を上げ、空をゆびさした。私はそちらをじっと見てみたが、太陽が橙に燃え盛るばかりで、なにも見当たらなかった。私がゆうとの方へと視線を戻すと、彼はまた一心不乱に空の向こうを眺めていた。

それからは、いつも私はゆうとを気にするようになった。学校帰りの公園で彼の姿を見つけると、なんとなくそばに行って、話しかけてしまうようになった。ゆうとが口をきくことができないのは分かっていたが、夕陽を眺めるその横顔にぽつりぽつりと語りかけていた。ゆうとは始め夕陽を眺めるばかりで私の話など聞いていないようであったが、ときおりこちらに目を向け、浅くうなずいたり、首を傾けたりするようになった。しまいには、私の話に声をたてずに笑うこともあった。初めてゆうとの笑顔を見たとき、私はなんだかとてもうれしくなったのをよく覚えている。

そんなある日、ゆうとが公園へ来なくなった。太陽が傾き始めてから、沈むまで、ジャングルジムの上で待っていたりもしたけれど、ゆうとは全く現れなかった。それは学校にしても同じなようで、ここ数日ゆうとの姿を見たものがほとんどいなかった。

ゆうとの家へ行ってみよう。

そう考えたのは、ゆうとが公園へ来なくなって、一週間ばかりが過ぎたころだった。大人たちの忠告や周囲の視線を分かってはいたけれど、私にはあの口のきけない不思議な雰囲気をまとった少年が恋しくてたまらなかった。

ゆうとの存在は近所でも有名であったので、彼の家を知るのはとても簡単なことだった。私は一度家に帰り、ランドセルを置くと、ゆうとの家へ行きチャイムを鳴らした。家は沈黙したままだ。二度、三度と鳴らしてみたが、誰も出てこない。諦めて帰ろうとしたとき、庭の方からかすかな笑い声が聞こえた。誰かいるのだ。そう思って、庭への門を押すと、意外にすんなりと開き、私の眼前に道が開けた。狭い石畳を抜けると、小さな庭が広がっており、そこにおかれたベンチにゆうととその母親らしき人物が腰かけていた。彼女はずっとほがらかな笑みをたたえていて、ひたすらゆうとに話しかけていた。ころころと鈴を鳴らすような声が響き渡る。私はゆうとに向かって手をふった。

「ゆうと！」

その瞬間、母親の表情がすっと変わった。氷のように冷たい目線をこちらへ投げかけると、わずかに腰を浮かせた。しかし、それよりも早く怖い顔をしたゆうとがばっとこちらへ駆け寄ってきて、私を庭の外へと押し出した。そして、私の目の前でばたんと音をたてて、門を閉めた。門が閉まる直前、ゆうとの後ろから母親が迫ってきているのが見えたが、門で閉ざされたため見えなくなった。一瞬、母親のヒステリックな甲高い声が聞こえたが、幼い私にはなにが起きたのかあまり理解できず、ただ茫然と立ち尽くした。そして、なんだかむしゃくしゃとして、ただぼろぼろと涙がとまらずに家に帰った。

次の日、私はクラスの担任によって、ゆうとが亡くなったことを知らされた。担任は言葉を濁していたが、私は近所の人の話でゆうとが母親に殺されたことを知った。

「あの子ののどね、母親がつぶしちゃったのよ」

おしゃべり好きの近所のおばさんは、私にそう言った。

「四、五年前にね、ゆうとくんが女の子と楽しそうに遊んでるのを見て、かっとして、ね」

歪んだ愛情だったのよぉ。おばさんは口元に手をやりながら嘆いた。

ゆうとの母親は精神病院にいれられたらしい。もともと情緒不安定であり、ゆうとに近づくものに対して鋭い嫉妬を抱きやすかったようだ。

ときどきふと考える。ゆうとはなにを思って、夕陽を眺めていたのだろう、と。母親の醜い嫉妬心にあおられ、口をきけない状態でありながら、いつも無心に夕陽を見ていた。あの向こうになにかあると思ったのか。あれが沈めば、新しい朝が来ると思ったのか。

私にはいまだにその答えが分からない。だから毎年彼の命日になると、公園のジャングルジムに登る。そして、ずっと夕陽を眺める。燃え始めてから、沈むまで。それは、結婚して子供ができた今でも変わらない。

「ママ、どうして夕陽を眺めているの」

五歳になる息子に尋ねられ、私はゆっくりほほ笑む。

「ママの友達がいつもこうしてたのよ。理由は分からないけど、いつも、ね」

そう答えて、私は息子の手を握る、そうして、この手の中にある小さな命をいつまでも大切にしていこうと、深く心に誓うのだ。

明日は明日の風が吹く

～区貸荘の夜～

ガスの元栓締めた、窓と玄関の鍵は掛けた、テレビの電源はちゃんと切った。よし、今日のチェック終わり。さぁ寝よう。

学校なんて行きたくないよ…第一、行ったってみんなに馬鹿にされるだけだ。僕はピエロじゃないんだぞ…もう…やだ…

まただ。また通販に手を出してしまった。先月もそれで痛い目見てるのに…反省しなきゃ。でもこの包丁よく切れるわー。

…どーも寝付けない。枕を変えたせいかな。明日も仕事があるから早く寝ないと…あ、外の星が綺麗だ。穏やかな光だなぁ。

週末の旅行、楽しみだなぁ。海鮮丼にタ張メロン、ジンギスカンも捨てがたいわ…あぁそう、とうもろこしも忘れずにね。

いつも下の方から変な音が聞こえてくるんだよな…いったいなにをやってるんだ。一度大家さんに調べてもらうべきか。

眠い。でもこの仕事は今日中に仕上げなければ…大事な取引先が明日俺を待っているんだ…でも、ちょっとだけなら寝ても…

また彼女と喧嘩してしまった。傷つけるつもりなんて全くないのに。ああ、明日会ったらなんて声を掛ければいいんだろう…

サトシのやつ今日も来なかったな…今どうしてんだろ。ちょっとからかったらむきになりやがって…来ないと謝れないだろ。

近現代における情報錯綜が齎す…これ何て読むんだ。電子辞書を…げ、電池切れてる。しゃーない、買いに行くか。

だーもう隣の家の子の泣き声がうるさくて集中できん！この前も勘弁してくれと言ったんだがなぁ。耳栓でも買っておくか…

やっと寝てくれた…予想はしていたけれどそれ以上の辛さだわ…あぁまた起きちゃった。いつになったら寝られるかしら…

Z
Z
Z
Z
・
・
・

まずい、ゲームに夢中になって忘れてたけど、明日試験じゃん…まだ今から始めれば明日までになんとか間に合うかな…

あら、また二〇一号室の望月さん滞納だわ。先月も注意したばっかりなのに…今度は追い出すくらいの事言わなきゃ駄目ね。

やっと帰ってこれた。駅まで自転車ってのも中々辛いもんだな…しかも残業とかぶると地獄だなこれ。ちょっと考えるか。

ただいま留守にしております。発信音の後、お名前とご用件をお話し下さい。FAXを送られる方はスタートボタンを押し…

ふぃー。やっぱ風呂上がりはビールに限るね。だけどお腹が最近気になってきたんだよなぁ…運動するにも時間ないし…

えーっと、明日のゴミは…資源ゴミか。段ボールは一杯あるけどまとめてないなぁ…でも出さないとまた二週間待つのか…

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	スチール缶	0 pt	8 位	0 sp
		うわあ、なんとまあ、ダイタンな。 　表紙のためにあるような勢い作品でしたね。その心意気が実って、めでたく表紙、しかも「口を開けろ」と歯医者さんへの絶妙の継投がかないました。ぱちぱちぱち。 イチオシフレーズ：「スティール缶」byサイファー（たぶん）		
02	正義の味方？虫歯菌	6 pt	4 位	1 sp
		痛そう、で引き込んで、きっちり調べて書き込んだ中段から、ラストでの主張へ。 　みごとな正当派でした。「平衡」という最新概念をキーワードに織り込んだワザもなかなか光ってました。増えるといいな、正当派。 特別賞：骨粗鬆賞 by FAIL(失格）班(正当派だったから何とか賞を上げたかった)		
03	□ほしいもの	2 pt	7 位	0 sp
		□の持つフシギな吸引力。人の欲望とは、満たされてふくらみつつ、それがかなうことで少うし淋しくもなる。そんな乙女心の揺れを、すとんと「チェックボックス」として視覚化していただきました。 　チェック（！）のマフラーのよく似合う作者さんでしたね～。		
		7 pt	3 位	1 sp

04	絵描きの話	ていねいな描写で組み立てたファンタジックストーリーに、泉のように浸りきって読めました。「うわあああ……」は、静謐な雰囲気ブチコワシなのでは？　と私は思ったのですけれど、イチオシフレーズに選んでる班もあるのですね。 　あと、ラストのハッピーエンドが、少し付け足しっぽいか。 　でも、全体の映像的なつくりがとても効果的で、そこをしっかり読んでもらえてのブロンズメダルでした。おめでとう！ 特別賞：どんな絵を描いたのか気になるで賞 by チロルCHOCO班(惜しくも次点、好評価でした） イチオシフレーズ：「うわあああああああ！　あああああああああ！」
		0 pt　8 位　0 sp
05	突然だけど・・・	さあ叱られに行くぞ！ 　という気合いのようなものでしょうか。リズム感があって、さらりと聞ける軽妙なトークでした。
		19 pt　1 位　0 sp
06	一羽の願い	ベッドの上からの感慨でしょうか。一は千よりも大きい。あかるい白い光景。 　なるほど、これだけコンパクトで意味深な光景になった背後には、たくさんの鶴の残骸がどさどさあったわけか。 　そんな努力が功を奏して、詩で首位の快挙でした。たくさんのコメント鶴(何羽あったのかしら？）を折ってもらっての金メダル、おめでとう!!

07	壁の街の住人の行く末	0 pt	8 位	0 sp
		来週向けか否か、何とも悩ましい一品でした。お池の魚さん。 でもおかげで、お茶会の特別めにゅうは鯛焼き君。 正体を隠しつつという擬人化の工夫がよくなされていたのと、「見えない糸に首を吊られて」のフレーズがインパクト大でした。		
08	どみのふんとうき	14 pt	2 位	2 sp
		まさかの鶏襲来コケコッコー。そのクライマックスのはじけっぷりがフォントに乗ってて、起爆力がすごかったです。 もうドミノなんかそっちのけの鶏さわぎでしたね。作者さんトークもそればっかり。 お茶会では「今後、鳥で行きます」と宣言して「帰らせていただきます」と帰ってしまわれた作者さん。 だいじょうぶかなあ。昨年もひとりのネタ師が「唐揚げ」にからまって、その後、消息不明なんですけど…… 何はともあれ銀メダル、そしてイチオシフレーズ大賞、おめでとうございます!!　鳥以外のネタもお待ちしてますんで。 特別賞：ネーミングセンス賞 by Final班（ニワトリのネーミングセンスがすばらしすぎる。センスのかたまり、地上に舞い降りたエンジェル」←まじょ注：なんて班なんだ！）/　山田賞却処分 by Graduation班(笑える。鶏はない！） イチオシフレーズ：「鶏		

		襲来」×２　「おおっと、後ろから追い上げるのは……だ！」「山田、リンチ決定」「スタート・・・ストップ」
09	夕陽を眺めて	6 pt | 4 位 | 1 sp 　絵描きさんと同じく、ていねいに描き込まれて映像的にもアピールする逸品。 　だけれども、自らの存在が確実に友人の死を招いてしまったというのに、幼い「私」が受けたであろう衝撃や葛藤が描かれていないのが、何だか大きな忘れものをしてしまったような。 特別賞：殺人はやめま賞 by Denterシステマ班 イチオシフレーズ：「ゆうとはいつも」（withゆう　かと思った）
10	明日は明日の風が吹く　～区貸荘の夜～	6 pt | 4 位 | 5 sp 　はい、裏表紙です。 　窓ひとつごとに、ひとつの思い。その区々（←まちまちって読みます、ほんと）感が、しっかり出てました。ほんのり見える関係性もGOOD。 201号室、どこかなあ？ 　あちこちで話題をさらっての最多特別賞でしたね。御本人の自己ベストでもあるそうで、おめでとう!! 特別賞：なぜ一部屋空けたので賞 by Box班（なぜ？）/焼き豆腐の斑点に似てるっ賞 by End班(すき焼きがおいしい季節になったから）/とうもろこし賞 by トトロ班（カゲヤマのサガです）/　無限の可能性を感じますで賞 by □班 /　もうひとひねりしてほしかったで賞 by　立体J班 イチオシフレーズ：「でもこの包丁よく切れるわ

		～」「齎す」